
鎖固めのパラノイア

ゆきやとおる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鎖固めのパラノイア

【Nコード】

N3122BA

【作者名】

ゆきやとおる

【あらすじ】

人間を食らう無物、と呼ばれる怪が見える刑事、朱雀は事件現場で無物と遭遇し命の危機に遭う。そんな朱雀を助けた少年尊は無物を倒すために存在している宝珠を得るため街を転々としていた。偶然か必然か、朱雀と尊が出会う事によって物語の歯車が回りだす…。

プロローグ

「なんだよこれ…」

負傷した部下を抱えてただ一言口から紡ぎ出た言葉は、室内に僅か反響して消える。

静かな二人の息遣いの他に、ぼんやりとした声が響いている。それは声、と呼ぶには脆弱な音で、意味を成さない。低く、背筋に伝わるようなその声の主は二人を見下ろしていた。

部屋は生臭い。血の臭いが充満している。

男は震える右手で銃を構え、今自分たちを見下ろし、奇妙な声を上げている存在をこう呼んだ。

「化け物じゃねえか…」

鎖固めのパラノイア

KEEP OUT、と書かれた黄色いテープに張り巡らされた一室。
刑事の朱雀優雅は目の前の現状をまだ、理解出来ずにいた。
すぐゆうが

鑑識達が囲んでいたはずの一室が突然自分と隣の部下、笠家を残して化け物と対峙させられている状況だ。悲惨な現場は、その化け物の存在で一気に食事場と化しており、さながら自分は新しいディナーだろうと薄ら冷静な頭で朱雀は思った。
かさか

銃を鳴らすも、まるでおもちゃのように空間に歪められ、弾丸が真っ直ぐ飛んで行かず。化け物は先ほど倒れていた死体を平らげるとぴたりとこちらを向いたようだった。

ただし確証はない。目が無いのだ。体は2メートル程あり、マンシヨンの一室には狭すぎるほどの巨軀をしている。そして全体的に黒い霧のようで、手と思しきものが、先ほどの啄ばんでいた死体の一部を持っている。

そして顔らしき真ん中辺りにはその存在丸々を占める大きな口が、朱雀達を待ち構えているように少し上下に動いていた。

朱雀は最初この空間になった瞬間襲われ右肩を深く抉られてしまった笠家の止血を行い、彼を守るようにして化け物に向き合っている。どれぐらい時間が立ったのだろう。

朱雀はこうした非現実的なものを信じないで生きてきたが、流石にこれは夢とは思えないほどリアルティがある。頬を抓っても普通の現場に戻りそうに無い。

現状を理解できないまま、死を感じた瞬間、化け物は素早い動きで両手を振り上げ、朱雀をなぎ払った。

咄嗟にこぼれ落ちた笠家を抱きとめようとしたが叶わず、笠家は腕をぶらりと人形のように持ち上げられて化け物は大きく口を開いている。

無駄だと分かっているが、銃を構え、朱雀が叫んだ。

「笠家！」

轟音が鳴り響き、一度目を閉じた朱雀は何が起こったかわからず、辺りを見渡す。

耳障りな高い声が鳴り響き、べちゃりと床に落ちた残骸が、化け物のものだと気づいた時には、視界に先ほどまでこの空間にいなかった

た少年を見つけ、朱雀は目を開いた。
少年は漸く聞き取れるような声で一言、

「もう大丈夫です」

そう告げ、朱雀の足元にそつと笠家を寝かせた。

朱雀は直感した。自分たちは助かるのかと…。

「いやあ…ありがとうございました」

人がよさそうな笑みを浮かべた男が、少年に深く頭を下げる。

少年は無口で、別段謙遜するわけでも不遜になるわけでもなく手を振り、首を振る。

朱雀はそんな少年に感謝するでもなく胡散臭よこがわそうな視線を遣ると煙草に火を灯した。頭を下げていた男、横川はそんな朱雀の耳を引っ張ると少年の前に朱雀を連行する。先ほどの優しい表情を一変させ、強面な顔つきで横川は朱雀を睨んだ。

「てめえも命助けて頂いたんだから礼の一つぐらいしろ！」

「でも…警部…こいつガキですよ？」

「命の恩人に子供も大人も関係あるか、さっさと頭ぐらい下げろ、
つたくしょうがないヤツですみません…、八鬼さん」

少年―八鬼尊やぶみしんは無表情な口元にうっすらと笑みをつくり、再び首を

ふった。

朱雀は横川の腕を面倒そうに払いながら、深くため息をついた。

あの時、朱雀は確かにこの少年が不思議な術を使い、化け物を倒した所を見た。現場に居た他の人間も、突然笠家と朱雀の二人が消えたと言言しているし、実際アレがなんだったのか今でもわからない。尊は突然この現場にやってくると、その二人を連れ戻すと言ってあの空間に自らの意思でやってきたのだという。混乱した頭がまだ、整理の余地を求めている。

ふと尊の方から朱雀を見つめる視線を感じ、朱雀は下げていた頭を上げて尊を見上げた。

まだあどけなさが残る中性的な整った顔の少年で、やはり無表情だった。少年は聞き取りにくい声で胸元から一枚の紙を朱雀に向け、告げた。

「祓い料金、二人合わせて二十万円です、口座振込みにしますか？ キャッシュにしますか？」

勿論朱雀が怒鳴り声を上げてこれに抗議するのは、言うまでもない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3122ba/>

鎖固めのパラノイア

2012年1月8日01時46分発行